日本における李賀詩の受容研究

（要約）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D183096
氏　　名：張　悦

従来、日本文学に大きな影響を与えた詩人と言われたら、白居易をはじめ、李白や、杜甫、蘇軾らが取り上げられているが、李賀の日本文学にあたえた影響も無視できないことである。李賀詩は日本に伝えられて以降、人々に注目を受け、愛読されており、日本文学にも深く受容されている。李賀詩の舶載、収蔵、閲読、抄写、講義、学習、校正、注釈、刊刻、模倣、改写、翻訳などの一列の活動は、日本における李賀詩の受容を促進している。

学者たちの李賀研究に関する論稿は、汗牛充棟の観を呈している。しかし、李賀詩の言語表現や詩人論を中心とすることが主たる課題であるが、中日比較の視点や、日本文学における李賀の受容についてはあまり取り扱われていないと考える。したがって、本論は、日本における李賀詩集の各版本の流布と伝承、李賀詩の解読と受容、「鬼才」像の解読と受容、及び李賀詩の翻訳という四つの方面から、各時期の日本における李賀詩の受容の様相について考察する。李賀詩が日本に伝えられた時から現在までの完全な時間線を縦軸にして、通時的な考察を行う。これによって、日本における中国古典詩の伝播、受容の経緯をうかがう。

具体的には以下の通り、五章によって構成される。

第一章では、日本における李賀詩集の各版本の流布と伝承に着目して考察を進める。まず、李賀詩集が最初に日本に伝来した時期を明らかにている。次に、『李長吉歌詩』の注釈本の伝来の時期も資料に基づいて推定している。室町時代には、日本最古の李賀詩集である院本が生まれた。江戸時代になると、林羅山など三人の手によって、『李長吉歌詩』の林本が抄写された。その後、李賀詩集の舶来と刊行が次々と行われ、最も後世に影響を与えたのは、文政元年に刊行された『唐李長吉歌詩』の官板本である。本章は、至元刊本、院本、林本、官板本及び楊本の伝承関係を明らかにしている。近代以降は、李賀詩集の刊行と収蔵は継続されつつ、日本語訳本という詩の受容の新しい形も生まれてきた。

日本における李賀詩の解読と受容については、第二章と第三章に分かれて、『将進酒』、『感諷』五首の『其一』、『其二』、『其三』及び『蘇小小の歌』という五首の李賀詩を中心として取り上げて分析する。

第二章においては、日本における『将進酒』の解読と受容に焦点を絞って検討を行う。まず、『将進酒』が日本に初めて伝えられた時期は、平安中期だと推知している。次に、各時代の日本における『将進酒』の受容の様相を考察することによって、日本文学への『将進酒』の影響を明らかにしている。また、『将進酒』は中日両国ともに好まれているが、中国より日本では大歓迎されており、両国の『将進酒』への理解も異なっている。その故は、両国の詩学伝統と美意識が異なっていることである。本章は、中日における『将進酒』の解読と受容を比較し、さらに中日詩学伝統の差異に検討を加える。

第三章においては、日本における『感諷』五首の『其一』、『其二』、『其三』及び『蘇小小の歌』の解読と受容に焦点を絞って検討を行う。中国では、「其一」における支配階級

の残忍非道への諷刺と非難や、庶民生活の苦しみへの同情が肯定されている。「其二」では、「昔を用いて今を諷刺する」という方法によって、文人たちが自身の不遇への嘆きや、政治志向が実現できない苦悶と格闘が共感されている。一方、李賀の「鬼詩」と見られている「其三」へは、マイナスの評価が高まっており、李賀の高い水準の作品とは認められていない。日本では、「其一」、「其二」に関する研究は稀であるが、「其三」に関する研究は非常に豊富である。「其三」は李賀の「鬼才」の地位を築く代表作の一つとして高く評価されており、「感諷」五首の中心だと認識されている。『蘇小小の歌』については、中国ではあまり言及されていなく、空虚で幻想の世界ばかり展開されているものなど、マイナスな評価が圧倒的に多い。それに対して、日本では『蘇小小の歌』は李賀の鬼神亡霊詩の傑作だと認められており、一種の美が発見されている。また、『蘇小小の歌』は日本の文学作品にも影響を与えた。本章では、その相違性の要因を、中日詩学伝統の視点から解明している。

第四章では、日本における李賀の「鬼才」像の解読と受容の様相を探る。中国との比較を中心に検討を行っている。「鬼才」李賀の「鬼詩」に対しては、中国では、古今の学者は賛否両論を持っており、批判する声も高い。また、「鬼才」の称は李賀にとっての適当性についての議論は絶えていない。もともと中国に由来している「鬼才」の称は、日本に伝えられてから、日本の李賀研究に与える影響力が中国をはるかに超えている。日本では、鬼神や墓地を素材にした詩が李賀の代表作として高く評価されており、学者たちは李賀の「鬼詩」に賞讃の態度を持っている。「鬼才」の像も、歴代の日本の文学作品の中に受容されており、人々の心の中に深く入り込んでいる。両国の「鬼才」への解読と受容の差異は、両国の鬼神観の相違に由来したものである。

第五章では、日本における李賀詩の翻訳について論述を展開する。李賀詩の日本語訳本を研究対象にしており、まず、出版時間順に訳詩集を 20 種取り上げ、日本における李賀詩の翻訳状況について概説する。次に、三つの時期に分けて、主には各時期における翻訳の言語環境、翻訳思想の特徴、訳本の特色と価値、訳本間の伝承関係及び訳者らの付き合いを中心に訳本を分析する。また、李賀詩翻訳の発展過程は、日本の中国古典詩の翻訳思想の特徴とその変遷を反映している。漢文訓読は、漢詩翻訳において堅実な地位を占めている一方、現代語訳の価値と役割は日増しに認識されるようになった。直訳は漢詩翻訳の中でずっと主流を占めていると同時に、意訳も不可欠な作用を発揮している。

要するに、日本の知識階層、漢学者たちの中国詩を学ぶ意欲は、中国古典籍の舶来、刊行などの活動を進めており、それらの活動は日本における中国古典詩の流布と伝承を促進している。政策などに影響された両国の文化交流は、盛んであったり、寂しかったりしているが、総じてみれば日本人は中国古典文化に対して歓迎、開放の態度を持っており、日本では中国古典文化の受容はずっと続けられていることである。

また、中日両国は詩学伝統と美意識が異なっているため、詩人とその詩への批評基準にも相当の差異が存在している。李賀の鬼神を素材にした詩に対しては、中国詩学は常に否定と批判の態度を持っている一方、日本詩学はそれに愛着を持って賞讃している。根本的に言えば、中国詩学は、「異の中で同を求め」であり、日本の詩学は「同の中で異を求め」であると考えられる。